

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



夢の島の第五福竜丸、1972年 きり絵・金子静枝(4めん記事)

被災五〇周年へむけて 第五福竜丸の新たな船出を

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

明けましておめでとうございます。
今年には財団法人第五福竜丸平和協会設立三〇周年、
そして明年はビキニ水爆実験被災五〇周年です。
当協会では、五〇周年の記念事業について、関係者
のご協力を得ながら役員・評議員の間で議論と準備を
進めており、今年の三・一ビキニ事件記念日前後に概
要を発表する予定です。

この機会に、現在進行中の第五福竜丸展示館内常設
展示の刷新を完成するとともに、他の美術館・アーチ
スト等の協力を得て特別展示も開催したいと考えてお
ります。さらに、学術研究調査とシンポジウム、記念
出版、第五福竜丸船体の調査、施設の拡充など、東京
都にお願しなければならぬものもあります。協
会自身としても募金等により一定の基金を用意するこ
とが必要です。

この時期に、改めて「第五福竜丸と対話しよう」と
いう趣旨で、ひろく小・中・高校の見学ツアーを呼び
かけることも行いたいと思います。

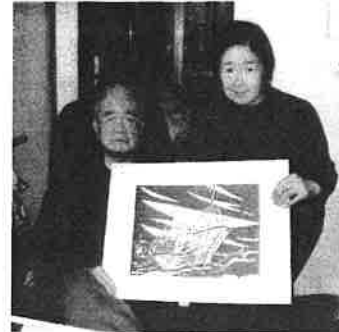
昨年、協会の会則に相当する財団法人としての寄
附行為についての全面的見直しを行い、今日の時代に
合ったものに改正し東京都の認可を得ました。また、
協会のホームページ開設、職員の学芸員資格取得によ
り、当協会はより整った、五〇周年プロジェクトを実
施するにふさわしい形になりました。
皆様の変わらぬご支援・ご鞭撻をお願い致します。

金子静枝さんから切り絵 作品の寄贈

切り絵作家の金子静枝さんから
第五福竜丸を描いた切り絵作品二
点が、このほど平和協会に寄贈さ
れました。

一点は、船体の保存が呼びかけ
られさまざまなとりくみが広げら
れていった時期、平和を願う美術
家が呼びかけ、船体を描く集いを
開いたときの作品(1めん掲載、
一九七二年)もう一点は、八四年
五月に展示館をスタートする平和
行進を描いた作品です。

金子静枝さんは一九三三年生ま
れ。広島・長崎やベトナムを題材
にした作品も多く創っています。
アメリカはベトナムから手を引
け”のゼッケンをつけ通勤した夫



写真は金子静枝さんと徳好さん

の徳好さんとともにベトナム支援
にも力を入れてこられました。
ビキニ事件当時は中野に住んで
いて、原水爆に反対する集会在近
所のお寺の境内で開かれ、司会を
した覚えがあると語っておられま
した。

利波多美さんのご家族か ら平和協会にご寄附

一月七日、焼津市で長年中学校
の教員をなさりながら、原水爆禁
止の運動に献身され、久保山すず
さんをお励ましつづけた利波多美さ
んのご子息、和幸さんと良子さん
ご夫妻が来館されました。

和幸さんご夫妻は、展示館の時
間をかけて見学し、視聴覚ルーム
でNHKドキュメンタリー『廃
船』の一部を鑑賞、この映像の中
の久保山さんの墓前祭の場面に
は、多美さんの姿も映っていま
す。

ご夫妻は、平和協会に一〇万円
のご寄附とお手紙を寄せられまし
た。その一節を紹介します。

母は、一昨年九四歳で生涯を
閉じました。戦前、一八歳で富山
で教鞭をとり、疎開のために焼津
に移りました。戦後、焼津にて、

戦前多くの教え子に戦地へ送って
しまったことを悔いて、「教え子
を再び戦場に送らない」の決意
で、焼津中学校で再び教鞭をとり
ました。そんななかでビキニ事件
にあい、以降、平和運動の道を歩
きました。(中略)私も母の遺志
を受け継いで、第五福竜丸として
久保山さんの声を多くの一人々に届
けたいと思います。(「福竜丸だ
より」〇一年七月号に利波さんに
ついての飯塚利弘さんの寄稿文が
掲載されています。)

お花見平和のつどい 今年四月五日開催

第五福竜丸から平和を発信する
連絡会による「お花見平和のつど
い・2003」は、四月五日
(土)に開かれます。今年には三回
目、東京地婦連が植樹した八重大
島桜もひとまわり大きくなり、つ
ぼみがたくさん付いています。つ
どいの頃には満開を期待しなが
ら、企画の具体化がすすめられて
います。

連絡会では、二月四日の打合わ
せ会に先立ち、福竜丸エンジンへ
のさび止めの薬品塗布の作業を行
います。

3・1ビキニ事件 記念のつどい

—水爆実験被災50周年にむけて—

- ◇とき・ところ 2003年3月1日/日本青年館(神宮外苑)
- ◇内 容 ●私の50年—元乗組員大石又七氏の証言—
●被災当時の映像資料、久保山愛吉氏インタビューなどの記録を上映
●被災50周年記念事業についての報告など
- ◇参 加 費 500円 ◇主催・問い合わせ 第五福竜丸平和協会

ビキニ水爆実験 被災五〇年にむけて

ヒバクシャとして私の五〇年を想う

大石 又七

ビキニ被爆から来年で半世紀になります。長いようで短い、というのが私の実感です。私の中には、あの日の出来事はまだ鮮明に記憶に残っています。いつでも思い出せます。異様な閃光、地鳴りとなって突き上げてきた轟音、巨大なキノコ雲、雪のように降り注いだ「死の灰」など、映像でも見るようにあとからあとから浮かんできます。

どこにでもいる何の変哲もない漁師でしたが、あの時から私たちの人生は大きく変えられてしまい、思いもよらない悲しい経過をたどりました。そんななかで、半数の仲間たちが世間からも知られることなく、四〇代、五〇代という働き盛りで死んでいきました。残された家族たちの嘆きや苦勞を見るたびに、私は言いようもない悔しさと怒りを感じてきました。ビキニ事件は平和時に、公の

海で漁をしていておきた事件です。目の前に加害者もいます。だが、事件は無理やりに握りつぶされました。そうしたなかで作られたこの悲劇を不運などという言葉でくくられてはなりません。

私も同じように死の淵をあゆみましたが、幸運にも生き返り、曲がりなりにも家族と暮らすことができています。同じ境遇に立たされた心苦しう思っていました。私に残されたこの命は、仲間の死を犬死にしないために使いたい、ビキニ事件をもう一度見直し、原点到ち戻って考える機会にしたい、そしてあらためて訴えよう、そう思ってきました。

ビキニ事件の資料を調べ直し、自分の記憶と体験の中にあるものと重ねながら活字にしました。それが、「ビキニ事件・命の岐路」です。被災五〇周年に向けて、みず書房から七月に出版されることになりました。

とになりました。

調べていくなかで、新しい事実をたくさん知ることができました。以前は見えなかったものも、時が浮かび上がらせてくれます。いくつもの点と線がつながり、おぼろげながらも事件の全体像が掴めるようになってきました。

先ず感じるのは、事件の発覚で、日本中に広がった、原水爆反対の運動に危機をつらせた日本政府が、あわてて政治決着にもちこみ、事件発生からわずか九ヶ月後の一九五五年一月四日に強引に調停を結んで蓋をしました。そのため、事件の記憶も福竜丸のことも、多くの人々の記憶から遮断され、そこで終わってしまいました。

私たち乗組員も、その時点から被爆者ではなくなりました。運動もその後からは、政治決着前に大きく騒がれて亡くなった久保山さんや船の保存を中心にしてすすめられ、事件は過去のものとなっていきました。そして世間からも消え去ってしまった事件として、急速に関心が薄れていきました。

しかし、乗組員の悲劇はそこからはじまりました。

この事件は、核兵器開発の妨げになり、日米友好にも邪魔になると、重要な意味をたくさん隠したまま、短期間のうちに終わりにされてしまったのでした。

時代背景も大きく作用してしましました。加害者は戦勝国のアメリカ、その最高軍事機密である水爆実験です。被害者は敗戦国日本のそれも漁師です。日米両政府とも私たちの人権を最初から無視しました。

私は昨年三月に、初めてマーシャル諸島を訪問して驚きました。マーシャル政府は今もアメリカに追加保証を要求しています。もちろん長い間放置されひどい生活を強いられてきたわけですが、それでも、私たちと同じ死の灰をかぶった被爆者に対して、今三五の病氣への補償が認められ、保護されています。

日本政府のこの事件と被害者への理不尽な処置を私は許せません。第五福竜丸の乗組員以外の漁師の被害も判らないままです。この事件はまだ終わっていないと思っています。(元乗組員、第五福竜丸平和協会評議員)

平和博物館と私 山根和代

平和博物館・資料と関わり始めて、一〇年以上になる。きっかけは、高知市にある平和資料館「草の家」が一九八九年に創立された時、会員になったことである。さらに一九九二年に、イギリスのブラッドフォード大学で第一回平和博物館国際会議が開催され、西森茂夫館長から参加するよう依頼さ



若者に語る草の家の西森館長

れ、参加したことである。会議では海外の平和博物館関係者と知り合い、その活動を紹介しようとして国際交流ニュースを出し始めた。また「草の家」の活動を海外に発信するために、英文で年一回通信を出し始めた。一九九八年大阪と京都で第三回国際会議が開催された際、「平和のための博物館・市民ネットワーク」ができ、日本国内のネットワークが作られた。それは、国内の平和博物館が交流できる土台となるもので、画期的なことであった。事務局が「草の家」となり、海外の平和博物館のニュースは「草の家」の会員だけでなく、全国各地の会員へ伝わることになった。

ところが、全国の平和博物館や、これから平和博物館を造りたい団体の活動、戦跡保存の活動のニュースも海外に発信し始めたので、非常に忙しくなってきた。

しかし海外と日本国内の平和博物館の動きを把握することができるようになってきて、日本が平和博物館の分野で先進国であることに気が付いた。ブラッドフォード大学平和学部

のピーター・ヴァン・デン・ダンガン博士(平和博物館国際ネットワークのコーディネーター兼国際ネットワーク通信編集長)は、「日本は平和博物館がある唯一の国である」と言われたが、確かにそうであると思う。

二〇〇一年の夏、全国の平和博物館・平和資料館、そしてこれから平和博物館を造りたいと考えている団体にアンケート調査を行って見た。意外なことに、平和博物館の国際ネットワークも国内ネットワークもあまり知られていないことがわかった。

さまざまな平和博物館を訪問してみると、情報や意見の交流をしたいという意見がある。確かに苦労して作った展示物を、少数の平和博物館でしか展示しないのは惜しい。しかし大きい平和博物館が集まってできた「平和博物館会議」と、「平和のための博物館・市民ネットワーク」の連携は、残念ながらあまりできていない。また国際的に日本の平和博物館が果たしている役割は大きいと思うが、実際に国際交流をしている平和博物館はまだ少数である。今後ネットワークを強化して、国内及び海

外の平和博物館と交流していくことが重要であろう。以前、第五福竜丸展示館を訪問し、実際に第五福竜丸を見て、水爆実験の恐ろしさを改めて想像することができた。学校で、また書物を通して学ぶことは可能だ。しかし自分の目で船を見るのど見ないのでは、大きな違いがある。

平和博物館・資料館を訪問して、人生がまったく変わったという人々がいる。アメリカのデイヴィット・クリーガー氏は、広島平和資料記念館を訪問して大きな衝撃を受け、現在、核兵器廃絶のために活躍されている。

平和資料館「草の家」は、小規模だが、平和、環境、人権、開発問題等に取り組んでいる。また平和コンサート、平和美術展、中国・平和の旅など、平和の文化の創造面でも大きな役割を果たしている。子どもや若者は、自分が置かれている状況を把握し、自分ができることを見出すと、生き生きとし始める。そんな場を提供する平和博物館が増えると、将来に希望が持てるのではないだろうか。(平和資料館「草の家」、高知大学非常勤講師、平和学)